

複式学級を有する小学校の体育科カリキュラムについての報告Ⅱ

－発達特性や指導内容に応じた運動教材の設定を探る－

阿 部 大 亮 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

當 房 省 吾 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

清 水 将 [岩手大学教育学部]

A Report of Problems in Physical Education Curriculums with Combined Classes in Kagoshima Prefecture II

ABE Daisuke・TOUBOU Shogo・SHIMIZU Sho

キーワード：複式学級、体育科カリキュラム、発達特性、指導内容、教材設定

1. 問題の所在

鹿児島県は、多くの離島・へき地を抱えており、小学校 526 校のうち、その半数近くの 243 校が複式学級を有する小学校である（平成 28 年度）。このような複式学級を有する学校における体育科の授業では、「異学年のめあてが異なる教材の進め方」「少人数によるゲーム領域の指導の在り方」「体力差・体格差からくる序列意識が生じ、競争心の高揚や運動への動機付けの難しさ」などの課題が見られる。教師は、これらの課題を解決するために、カリキュラム編成や教材設定、単元構成及び単位時間の指導方法の工夫を行いながら、子どもたちに指導内容を身に付けさせるための授業改善に取り組む現状がある。しかしながら、体育科カリキュラムに焦点を当てると、「A 年度・B 年度方式」で行っている学校の中には、単式の指導計画をそのまま活用することによって、3 年生が 4 年生内容から授業を受けることや、4 年生が 3 年生の内容を受けることが発生し、指導内容を系統的に学ぶことができない現状が存在する。また、「1 本案」の学校の中には、同単元・同内容を 2 学年繰り返すだけで、子どもたちにとっては、課題意識を高めながら、意欲的に学習に取り組むことが難しい現状が見られる。阿部ら（2016）は、鹿児島県の複式学級を有する学校の体育科カリキュラムについての現状把握のためのアンケート調査を行い、複式学級を有する学校の体育科カリキュラム編成の実践的課題の抽出を行った。その結果の中で特筆すべきは、体育科の授業において指導をすることが難しいと考えている領域では、「ゲーム・ボール運動領域」であるとの回答が、圧倒的に多くみられたことだ（34 校 / 66 校）。これは、2 個学年が同じ教材の中で学ぶため、発達の段階に違いがあり、技能差や思考面での差が出やすい傾向にあったり、当該学年で身に付けなければならない指導内容が曖昧になったりするからである。

このようなことから、複式学級を担当する教師らにとって、とりわけ困難であると捉えるボールゲーム系領域の指導及びその計画立案について詳細な検討を加えることは、避けることのできない重要な今後の課題として位置づけることができる。

そこで、本論では、ゲーム・ボール運動系領域を対象として、複式学級の体育科カリキュラムづくりの基本的な考え方とその効果的な実践に向けた教材設定の要件の提示を行うことを目的とする。

2 子どもたちの発達特性について

複式学級では、2 個学年が一緒に学ぶため、学級の構成員である子どもたちの発達の段階に違いが見られる。つまり、同じ教室の中にいるからといって、同じような指導の在り方を行えばよいというわけではない。これらのことから複式学級の指導を行う上では、発達特性をしっかりと整理し、当該学年でどのような特性があるか理解した上で指導を行っていくことが求められている。表 1 は、小学校期の発達特性を「運動面」「認知面」「社会面」で整理したものである（表 1）。

表 1 小学校期の発達特性

学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
運動面	<ul style="list-style-type: none"> ・大筋使用の活動が多く、運動は不器用である。 ・活動欲求が強い。運動は、遊びであり、あきやすい。 ・細身の体型である。体は、幼児期に比べるとあまり成長しない。発育に性差がない。 ・眼球運動および目と手の協応が少しずつできるようになる。 ・神経系が急速に発達している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大筋使用の活動が多く、運動は不器用である。徐々に器用になってくる。運動の組み合わせが可能になる。 ・活動欲求が強い。技能習得に興味が出てくる。 ・細身の体型である。引き締まった体型で成長は安定している。 ・眼球運動および目と手の協応ができるようになる。 ・神経系の急速な発達が終わる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大筋使用の活動が多いが、細かな筋肉が使えるようになり、器用になってくる。 ・活動欲求が強い。運動の節約性が見られる。 ・調和のとれた体格である。体の成長は安定している。 ・眼球運動および目と手の協応が安定する。 ・個人差が出てくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大筋使用の活動が多いが、細かな筋肉が使えるようになり、器用さが増す。 ・運動を目的として捉えることができるようになる。 ・調和のとれた体格である。女子の成長が大きいの。 ・眼球運動および目と手の協応が安定する。 ・個人差が大きくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大筋使用の活動が多いが、細かな筋肉が使えるようになり、様々な運動を器用にを行う。 ・運動を目的として捉え、粘り強く取り組めるようになる。 ・第二次性徴が始まり、女子の方が成長が大きく男子より身長が大きくなる。 ・循環器系の発達し、持久力がつき、粘り強くなる。 ・男女差、個人差が大きくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大筋使用の活動が多いが、細かな筋肉が使えるようになり、巧緻性が高まる。 ・運動を目的として捉え、粘り強く取り組めるようになる。 ・第二次性徴が始まり、女子が男子の体格を上回る。男子の筋力発達が開始する。 ・循環器系の発達が大きく持久力がつき、粘り強くなる。 ・男女差、個人差が大きくなる。
認知面	<ul style="list-style-type: none"> ・生活経験が頼りで、直感的思考を行う。 ・人によって、運動に対する気付きの差が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活経験が頼りで、直感的思考を行う。 ・人によって、運動に対する気付きの差が大きい。 ・運動を体全身の動きで捉えている。 ・技能向上に意識が向き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的・客観的思考力ができはじめる。 ・記憶力が進歩する。 ・知的好奇心が強まる。 ・運動を一連の動きや体の部位に着目して捉えている。 ・自己評価のできるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的・客観的思考力が伸びる。 ・記憶力が進歩する。 ・知的好奇心が強まる。 ・運動を一連の動きや体の部位に着目して捉えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的・客観的な思考ができるようになり因果関係を分析的に考えることができる。 ・運動を一連の動きや体の細かい部位に着目して捉えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的・客観的な思考ができるようになり因果関係を分析的に考えることができる。 ・運動を一連の動きや体の細かい部位に着目して捉えている。
社会面	<ul style="list-style-type: none"> ・大人への心理的な依存が強い。 ・自己中心的である。 ・かんしゃくをおこしやすい。 ・個や少数数での遊びを好む。 ・1つの遊びに飽きやすく、10分～15分で飽きる。様々な遊びに興味がある。 ・一緒に遊ぶ仲間も固定化されていない。日に目に見え変わる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝敗へのこだわりが出てくる。 ・大人への心理的な依存が依然強い。 ・自己中心的である。 ・主張をゆすらない。 ・かんしゃくをおこしやすい。 ・個や少数数での遊びを好む。 ・チームゲームへの興味が出てくる。子ども同士で結びつきが、結びつきは希薄メンバーも変わりやすい。 ・積極的にチャレンジしたがりが、粘り強くやりとげる能力がほとんどない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・勝敗へのこだわりが出てくる。 ・仲間を大切にする所属感・連帯感が強くなる。 ・話し合いによる問題解決ができる。 ・リーダー格が出現してくる。 ・失敗を責める言動が見られる。 ・ルールを守らない面が見られる。 ・男女を意識し出す。 ・がむしゃらに努力するが、つまずくとあきらめやすい。 ・ルールのある集団ゲームが行えるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間意識がますます強くなる。 ・話し合いによる問題解決ができる。 ・リーダーとフォローなど社会性が高まる。 ・失敗を責める言動が見られる。 ・社会的性が高まり、学級がまとまる。 ・よい子指向から脱却し、自己主張が強くなる。 ・自分を比較して、自信をなくしやすい。 ・同性集団での行動が多い。 ・グループ学習が適している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割遂行へのこだわりが出てくる。 ・チームプレーへの関心が高まる。 ・他人の立場で考えることができる。 ・リーダーの選出ができる。 ・社会的承認願望が出てくる。 ・フェアプレーを好む。 ・内面的な基盤での仲間とのつながりが強くなる。 ・自分を比較して、自信をなくしやすい。 ・自己意識が強い。 ・自主的に自分の力で解決する学習が適している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役割遂行へのこだわりが出てくる。 ・チームプレーへの関心が高まる。 ・他人の立場で考えることができる。 ・リーダーの選出ができる。 ・社会的承認願望が出てくる。 ・フェアプレーを好む。 ・友人関係はせまく・深く固定化 ・自分を比較して、自信をなくしやすい。 ・自己意識がさらに強い。 ・自己中心的な見方がへる。 ・異性への関心が強い。 ・自発的・自立的な学習が適している。

上記のように、各学年の発達特性を整理することで、子どもたちの特性を理解した上で、指導を行うことができる。次項では、平成 20 年度改訂小学校学習指導要領解説体育編を基に明確化した各学年の指導内容について述べる。

3 各学年の指導内容の明確化

前項では、各学年の発達の段階を整理した。ここでは、体育科の内容は2学年で示されているが、ゴール型を例にとり、平成20年度改訂小学校学習指導要領解説体育編を基に、各学年の指導内容の明確化を図ることにした。(表2)。

表2 平成20年度改訂小学校学習指導要領解説体育編を基に明確化した各学年の指導内容

1 年		2 年	
技能	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらったところに緩やかにボールを投げたり、転がしたりすること。 ○ ボールが飛んだり、転がったりしてくるコースに入ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボールを捕ったり止めたりすること。 ○ ボールを操作できる位置に動くこと。 	
	○ ボールゲームの行い方を知り、楽しくゲームができる場や得点の方法などの規則を選ぶこと。		
思考判断		○ ボールゲームの動き方を知り、攻め方を見付けること。	
	○ ボールゲームに進んで取り組むことができる。	○ ボールゲームに進んで取り組むことができる。	
態度	○ 運動の順番やきまりを守り、友達と仲良くゲームをすることができる。	○ 用具の準備や片づけを、友達と一緒にすることができる。	
		○ 危険物が無いか、ゲームをする場が十分あるかなどの場の安全に気を付けることができる。	
3 年		4 年	
技能	<ul style="list-style-type: none"> ○ 空いている場所に動く。 ○ ボールを持ったときにゴールに体を向ける。 ○ 味方にボールを手渡ししたり、パスを出したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 空いている場所に素早く動く。 ○ 向かってくるボールが取れる位置に移動する。 ○ ボール保持者と自分の間に守備者がいないよう位置に移動する。 	
	○ ゴール型ゲームの行い方を知る。		
思考判断	○ ゲームや練習をする時の規則などを選ぶ。	○ ゲームや練習をする時の規則などを選ぶ。	
	○ ゴール型ゲームの特徴に合った攻め方を知る。	○ ゴール型ゲームの特徴に合った攻め方の簡単な作戦を立てることができる。	
態度	○ ゴール型ゲームの学習に進んで取り組むことができる。	○ ゴール型ゲームの学習に進んで取り組むことができる。	
	○ 運動の順番やきまりを守り、友達と仲良くゲームする。	○ 用具の準備や片づけを、友達と一緒にする。	
		○ 危険物が無いか、ゲームする場が十分あるかなどの場の安全に気を付ける。	
5 年		6 年	
技能	<ul style="list-style-type: none"> ○ 近くにいるフリーの味方にパスを出すことができる。 ○ ボール保持者からボールを受けることのできる場所に動くことができる。 ○ パスを受けてシュートなどをすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 相手にとられない位置でドリブルすることができる。 ○ ボール保持者とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐことができる。 	
思考判断	○ ゴール型の楽しいゲームの行い方を知っている。	○ チームの特徴に応じた攻め方を知り、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てることができる。	
	○ プレーヤーの数、コート広さ、プレー上の制限、得点の仕方などのルールを選ぶことができる。		
態度	○ 効果的な攻め方を知り、チームに合った攻め方を選ぶことができる。	○ チームの特徴に応じた攻め方を知り、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てることができる。	
	○ ゴール型ゲームに進んで取り組むことができる。	○ ゴール型ゲームに進んで取り組むことができる。	
	○ ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをすることができる。	○ 用具の準備や片づけで、分担された役割を果たすことができる。	
		○ 場の危険物を取り除いたり場を整備したりするとともに、用具の安全に気を配ることができる。	

上記の表2のように、どの学年でどの内容を身に付けさせるのか明確にすることで、系統的に指導内容を身に付けさせることができる。次項では、これまでに整理してきた発達特性と指導内容を基に、どのように運動教材を設定するのか述べる。

4 発達特性や指導内容を基にした運動教材の設定の基本的な考え方

前述の「指導内容の明確化」を受け、その指導内容を身に付けさせる運動教材設定の重要性について述べたい。平成20年度改訂の小学校学習指導要領解説体育編では、ボールゲーム系領域においては、技能における指導内容や取り上げる運動教材の例示が「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」で示されている。これらの分類について高橋（2010）は、「限定的なボールゲームの種目中

心の考え方から、学習内容の共通性が高いボールゲーム群から選択して運動種目を選択して学習させるべきである」と述べている。さらに高橋（2010）は、「これらの各型に属するゲームは、共通性が高く、学習した能力が他の種目に転移する」と述べている。これらのことから、運動種目固有の技能を教えるのではなく、型に共通する戦術を理解させていくことが重要であるといえよう。つまり、このことは、「バスケットボール〈を〉教えていた体育授業」から「バスケットボール〈で〉教える体育科授業」への考え方の転換を意味しているものである。

このような考え方を基に、複式学級を有する学校の体育科授業を考えると、「少人数であることや、技能差・体格差が大きいことから、正式なルールやコートで学習を行うことが難しい」という課題があがっている。その解決策として、最も重要なことは、正規なルールやコートで学習を行うという種目中心の考え方から脱却し、自ら運動教材を工夫し、設定するという指向である。以下では、指導内容を身に付けることができ、自分の学級・学校の児童の実態を鑑み、どのように運動教材を設定するのか、についての考え方を詳述する。

岩田（2012）は、「内容的な視点と方法的な視点を基にスポーツや遊びである素材を加工・改変したものを教材」と述べている。図1は、教材づくりの基本的な視点である（図1）。運動教材を設定するには、数多あるスポーツや遊びなどの素材を選ぶ。そして、大きく2つの視点で加工・改変することが重要である。1つ目は、学習内容を明確にするという「内容的な視点」である。指導内容を確実に身に付けることができるのかという視点である。2つ目は、子どもの学習意欲を高めることができるかといった「方法的な視点」である。具体的には、知識・技能、思考力・判断力・表現力、社会的行動等の内容を明確にして、発達の段階に応じた興味・関心、学習機会の平等、プレイ性の確保等に配慮して、全ての児童が楽しめる教材をつくることを意味する。この2つの視点を基に素材を加工・改変することで、よりよい運動教材をつくることにつながる。

前述のように内容的な視点を含み、方法的な視点で考えた際に、「少人数であることや、技能差・体格差が大きい」という複式学級の児童の実態を通して考えると、どの運動教材を設定するのか、さらに加工・改変できないかを吟味し、設定することで、子どもたちが目を輝かせながら、ボールゲーム系領域の授業を楽しむことにつながるものと考えられる。



図1 教材づくりの基本的視点 岩田（2012）を一部改変

ここでは、種目を学習することを中心とする考え方から脱却し、型に共通する技能を、運動教材づくりを行いながら、身に付けさせていくことの重要性について述べてきた。さらに、次項では、これまでに述べてきた「発達特性の整理」「指導内容の明確化」を基にした「運動教材の設定」とその教材の中での子どもたちの様相を明らかにしていく。

5 発達特性や指導内容を基にした教材設定と子どもたちのゲーム様相

これまで述べてきた、発達特性と明確化した指導内容を基に、子どもたちの動きやゲーム様相がどのように発展していくのか整理した。このことにより、発達特性を基にして指導内容を身に付けさせる教材の要件を抽出することができると考えたからである。

5. 1 1年生のボールゲーム

1年生のボールゲームでは、発達特性と指導内容基に、子どもたちのゲーム様相を以下の表3のように整理した(表3)。様相を基に教材は、多様な場でのボール投げゲームを設定した。

表3 1年生のボール投げゲームの様相

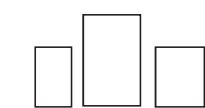
発達特性	<ul style="list-style-type: none"> ・活動欲求が強い。 ・運動は、遊びであり、あきやすい。 ・ボールが飛んだり、転がったりしてくるコースに入ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個や少人数での遊びを好む。 ・運動は、力点が定まっていない。 ・運動は、不器用でぎこちなさがある。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらったところに緩やかにボールを投げたり、転がしたりすること。 	

教材やゲーム様相

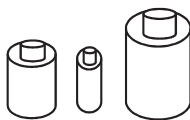
子どもの意識	色々な投げ方で、たくさん投げて遊びたい。
--------	----------------------

【単元前半】

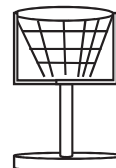
☆多様な投げ方で遊んだり、投感覚を養う遊びを取り入れたりする。



段ボールなどの的当て



ペットボトル転がしの当て



ふんわり投げ入れ

上記のような場を設定し、上投げでの的当てや転がしの当て、ふんわり投げ入れなど、両手上投げ、両手下投げ、両手でスローインのように、両手で体をひねって、片手で体をひねって、両手で転がして、片手で転がしてなど多様な投げ方で遊ぶことができるようにする。ルールは、的の種類や当てた・倒した、入れた回数を個人で点数をためていく。ボール一人一個。

子どもの意識	的当てで、いろいろな投げ方で、的に当てたり、的を倒したりするのが楽しいな。もっと、投げたいな
--------	--

【単元後半】

☆段ボールの的当てゲームを中心に上投げの技能を高めさせる。



大きさが違う段ボールなどの的当て



重さの違う段ボールなどの的当て

メンコ 紙鉄砲
新聞紙投げ
シャトル投げ
などの感覚づくりも行う。

上投げを中心に取り上げて、強いボールを狙って投げる動きを高めさせる。的の大きさや重さで点数化してペア等で競い合わせる。

子どもの意識	体をひねった投げ方で、強いボールを狙って投げるできるようになってきたぞ。
--------	--------------------------------------

4. 2 2年生のボールゲーム

2年生のボールゲームでは、発達特性と指導内容基に、子どもたちのゲーム様相を以下の表4の

ように整理した（表4）。

表4 2年生のシュートゲームの様相

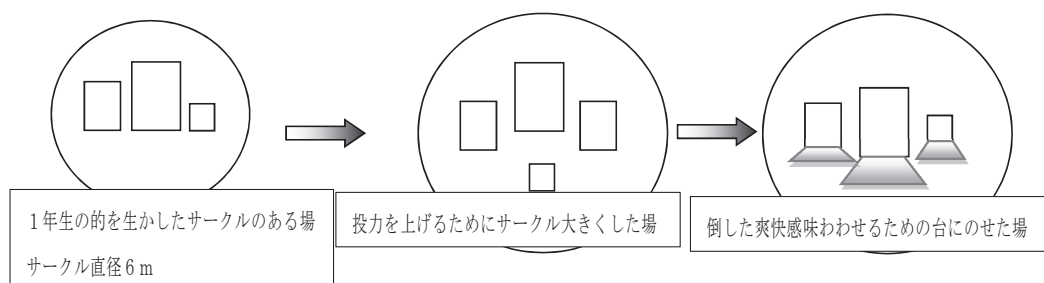
発達特性	・活動欲求が強い。 ・チームゲームへの興味が出てくる。 ・技能の習得に意識が向きます。
指導内容	・運動は、徐々に器用になってくる。 ・ボールを捕ったり止めたりすること。 ・ボールを操作できる位置に動くこと。

教材やゲーム様相

子どもの意識	強いボールを狙って投げることができるよ。チームで対戦したいな。
--------	---------------------------------

【単元前半】

☆1年生の場を生かしながら、チーム対抗での当てゲームを行う。

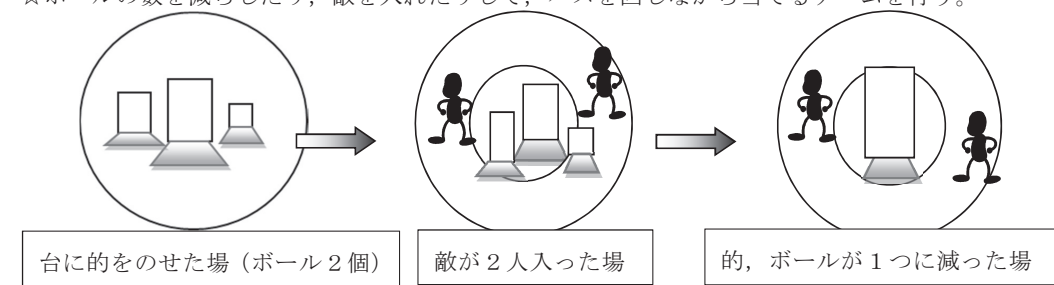


上記のような場を設定し、1年生の場を生かしながら、チームで対戦する。ルールは、的の種類や当てた・倒した、入れた回数を個人で点数をためていく。ボールは、1人1個。

子どもの意識	当てるだけでは、簡単だから、もっと難しくしたいな。
--------	---------------------------

【単元後半】

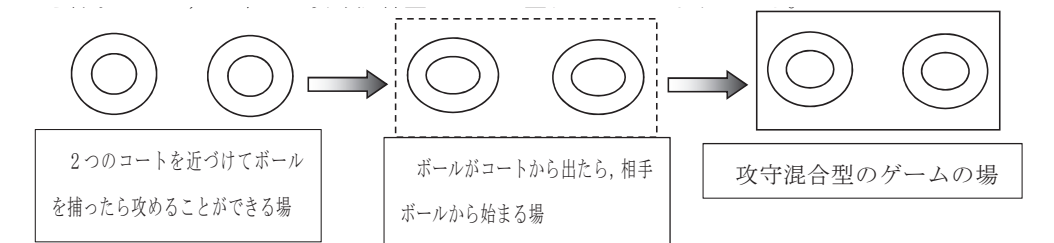
☆ボールの数を減らしたり、敵を入れたりして、パスを回しながら当てるゲームを行う。



子どもの意識	ボールが減ってパスが必要だ。敵をかわす方法を考えるぞ。
--------	-----------------------------

【単元終末には】

☆シュートゲームを発展させて、攻守入り乱れ型のシュートゲームやコートをつくったシュートゲームを行うことで、3年生の攻守入り乱れ型のゴール型ゲームにつなげさせる。



子どもの意識	ボールを捕ったら、攻めたいな。シュートをした後、取りにいくのが大変だ。
--------	-------------------------------------

5. 3 3年生のゲーム（ゴール型）

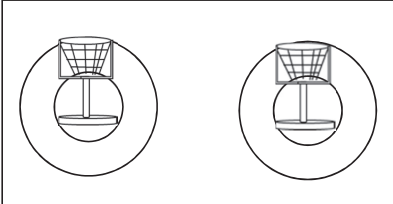
3年生のボールゲームでは、発達特性と指導内容基に、子どもたちのゲーム様相を以下の表5のように整理した(表5)。様相を基に教材は、シュートゲームを発展させたセストボールを設定した。

表5 3年生のセストボールの様相

発達特性	<ul style="list-style-type: none"> ・細かな筋肉使えるようになり、器用になってくる。 ・運動を効率よく行えるようになる。 ・勝敗へのこだわりや仲間意識が高まってくる。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的・客観的に思考できはじめる。 ・運動を体の部位に着目して捉えることができる。 ・ルールのある集団ゲームが行えるようになる。
教材やゲーム様相	
子どもの意識	パスをつないで、ゴール前までボールを運んで的に入れて点数をとりたいな。

【単元前半】

☆ 2年生のシュートゲームを発展させたセストボールを教材として設定する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・パスを上手くつないでゴール前まで進むことができない。 (課題1：見方がとりやすいパスは、どんなパスだろう。) (課題2：パスをもらったら、どこを向けばよいのだろう。) (課題3：パスをつなぐには、どこでパスをもらえばよいのだろう。)
---	--

☆ パスやキャッチ、空いている位置でパスをもらう技能を高めるドリルゲームを位置付ける。

子どもの意識	パスがつながって、相手ゴール前まで行くことができるようになったぞ。でも、敵がいてシュートが打てないな。
【単元後半】	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール前で、敵をかわしてシュートすることができない。 (課題1：シュートを打つには、どこでパスをもらえばよいのだろう。) ・パスのもらいやすい位置やシュートを打ちやすい位置を生かした攻め方を知りたいな。 (課題2：パスのもらいやすい位置やシュートを打ちやすい位置を生かすには、どんな攻め方がよいのだろう。)
子どもの意識	パスがもらいやすい位置やシュートが打ちやすい位置が分かったし、できるようになってきたぞ。

5. 4 4年生のゲーム（ゴール型）

4年生のボールゲームでは、発達特性と指導内容基に、子どもたちのゲーム様相を以下の表6のように整理した(表6)。様相を基に教材は、シュートゲームやセストボールを発展させたハンドボールを設定した。

表6 4年生のハンドボールの様相

発達特性	<ul style="list-style-type: none"> ・細かな筋肉使えるようになり、器用さが増す。 ・運動を目的として捉える。 ・勝敗へのこだわりや仲間意識が高まってくる。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的・客観的に思考する力が伸びる。 ・運動を体の部位に着目して捉えることができる。 ・グループ学習が適している。 ・個人差が大きくなる。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ・空いている場所に素早く動く。 ・向かってくるボールが取れる位置に移動する。 ・ボール保持者と自分の間に守備者がいないよう位置に移動する。

教材やゲーム様相	
子どもの意識	パスがもらいやすい位置やシュートが打ちやすい位置が分かったし、できるようになってきたぞ。もっと点をとりたいな。
【単元前半】	
☆2年生のシュートゲーム、3年生のセストボールを基にしたハンドボールを教材として設定する。	
子どもの意識	素早く空いている場所に動くとパスがもらえるぞ。ゴール前のどこでパスをもらえば、シュートできるのだろう。
【単元後半】	
<ul style="list-style-type: none"> ・ゴール前で守られてシュートがうてないぞ。(課題1: シュートを打つには、ゴール前のどこでパスをもらえばよいのだろう。) 	
子どもの意識	ボールの反対側や両サイドでパスをもらうと、シュートが打てるようになったぞ。

5. 5 5年生のゴール型ボール運動

5年生のゴール型ボール運動では、発達特性と指導内容基に、子どもたちのゲーム様相を以下の表7のように整理した(表7)。様相を基に教材は、パスバスケットボールを設定した。

表7 5年生のパスバスケットボールの様相

発達特性	<ul style="list-style-type: none"> ・細かな筋肉が使えるようになり、様々な運動を器用に行う。 ・第二性徴が始まり、女子の方が成長が大きく男子より身長が大きくなる。個人差が大きくなる。 ・客観的な思考ができるようになり因果関係を分析的に考えることができる。 ・運動を一連の動きや体の細かい部位に着目して捉えている。 ・役割遂行へのこだわりが出てくる。 ・チームプレーへの関心が高まる。 ・自主的に自分の力で解決する学習が適している。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 近くにいるフリーの味方にパスを出すことができる。 ○ ボール保持者からボールを受けることのできる場所に動くことができる。 ○ パスを受けてシュートなどを行うことができる。

教材やゲーム様相	
子どもの意識	パスをつないで、ゴールを決めたいな。シュートが楽しいな。
【単元前半】	
☆4年生のハンドボールを生かした、パスのみのバスケットボールを教材として設定する。	
子どもの意識	味方にパスが入った瞬間空いている場所に走り込むとパスを素早く回すことができるぞ。ゴール下でシュートを打ちたいな。

【単元後半】

・ゴール下でシュートを打ちたい。
(課題1：ゴール下でシュートを打つには、ゴールの両サイドにどんなタイミングで動けばよいのだろう。)

子どもの意識	味方にパスが入った瞬間、ゴールの両サイドやボールの反対側に走り込むとパスをもらって、ゴール下でシュートを打てるぞ。
--------	---

5. 6 6年生のゴール型ボール運動

6年生のゴール型ボール運動では、発達特性と指導内容基に、子どもたちのゲーム様相を以下の表8のように整理した(表8)。様相を基に教材は、ドリブル1回バスケットボールを設定した。

表8 6年生のドリブル1回バスケットボールの様相

発達特性	<ul style="list-style-type: none"> ・女子が男子の体格を上回る。男子の筋力発達が開始する。個人差が大きくなる。 ・客観的な思考ができるようになり因果関係を分析的に考えることができる。 ・友人関係はせまく・深く固定化・自他を比較して、自信をなくしやすい。 ・自我意識がさらに強い・自己中心的な見方がへる。・自発的・自立的な学習が適している。
指導内容	<ul style="list-style-type: none"> ○ 相手にとられない位置でドリブルすることができる。 ○ ボール保持者とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐことができる。
教材やゲーム様相	
子どもの意識	パスが回って、点が取れるようになったぞ。でも、失点も多いな。どこで、守るとシュートされないのかな。

【単元前半】

☆5年生のバスケットボールを生かした、パスのみのバスケットボールを教材として設定する。

	<p>・パスを早く回わされて、シュートされ失点が多い。 (課題1：シュートされないためには、どのように守ればよいのだろう。)</p>
子どもの意識	ゴールとボール保持者の間に体を入れるとシュートを防ぐことができたぞ。

【単元後半】

・相手に上手く守られて得点がへった。ボールを早くゴール下に運びたい。ドリブル可
(課題1：どんな場面でドリブルを使うと、ゴール下にボールを早く運ぶことができるのだろう。)

子どもの意識	相手に敵がいないうちに、ドリブルを使うと、ゴール下にボールを早く運ぶことができるぞ。相手とボールの間に体を入れると、ボールを取られないぞ。
--------	---

6 複式学級の体育科カリキュラムづくりに向けた教材設定の要件

前述の発達特性や指導内容を基にした教材設定と子どもたちのゲーム様相を生かした、複式学級における低・中・高学年の教材設定の要件は以下の通りである。

学年	1・2年	3・4年	5・6年
要件	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多様な場で、多様な投げ方を遊びながら身に付ける ○ いろいろな個やいろいろな友達と遊べる ○ 2年生にかけてチームプレー ○ 遊び方を工夫できる ○ 感覚づくりを多様にする 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 勝敗をしっかりとつける ○ チームでのゲームを行う ○ 論理的に動き方を考えることができる ○ 大まかに、ゲームに必要な動き方が分かる ○ ボール操作のドリルゲームを行う 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 論理的に動き方や勝敗の要因を考えさせる ○ ゲームに必要な動きを分析的に捉えることができる ○ 練習方法や作戦を選択させる ○ 個人差に応じる ○ ボールのない所での動きを身に付けるタスクゲームを行う

7 まとめと今後の課題

本論では、鹿児島県における教育現場特有の課題である複式学級の指導、特に体育学習に焦点化をして、その課題解決を目指すための手立ての1つとして、「発達特性の整理」「各学年の指導内容の明確化」「発達特性や指導内容を基にした運動教材の設定」を主柱とした子どもたちのゲーム様相を明らかにしながら、複式学級における2個学年一緒に学ぶ際の教材の要件の紹介を行った。

複式学級では、子どもの発達段階や実態の幅が広く、小学校体育科では、前述した通り、小・中・高学年の2年間のまとまりで内容が提示されている。複式学級を担当する教師らは、この2年間のまとまりで示されている内容を、眼前の子どもの発達特性や実態に照合し、精緻に整理をすることが、すなわち、学習内容を的確に設定し、その内容に合致した運動教材の設定を行うことが、授業づくりにおいては不可避な作業であることが明確であるといえ、この作業が欠落してしまうと、子どもたちが「意味のない身体活動」に取り組む体育授業を創出してしまうことになる。本論において紹介した複式学級における教材設定の要件は、複式学級を担当する教師らにとって、今後の授業づくりにおいては、有用な指針になるものと考えられる。数多くの教師らに、それらが効果的に活用され、また改善されることを通じて、複式学級の体育授業実践の取り組みが実り多いものになることができれば幸いである。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成25～29年度研究紀要で発表した体育科の研究内容及び複式教育において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

引用・参考文献

清水将 (2017) 異学年合同体育の指導資料 学校体育活動における指導の在り方調査研究冊子

阿部大亮・當房省吾・廣瀬勝弘 鹿児島大学教育学部教育実践紀要第26巻

岩田靖 (2012) 体育の教材を創る. 大修館書店

鹿児島大学教育学部附属小学校編 (2013) 個の確立を目指す授業の創造Ⅰ, 平成25年度研究公開冊子

鹿児島大学教育学部附属小学校編 (2014) 個の確立を目指す授業の創造Ⅱ, 平成26年度研究公開冊子

鹿児島大学教育学部附属小学校編 (2015) 個の確立を目指す授業の創造Ⅲ, 平成27年度研究公開冊子

鹿児島大学教育学部附属小学校編 (2016) 個の確立を目指す授業の創造Ⅳ, 平成28年度研究公開冊子

鹿児島大学教育学部附属小学校編 (2017) 個の確立を目指す授業の創造Ⅴ, 平成29年度研究公開冊子

文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社

高橋修一ら (2015) 特集: 小規模校の体育授業を創る, 体育科教育, 63 (2)

高橋健夫・立木正・岡出美則・鈴木聡編著 (2010) 新しいボールゲームの授業づくり, 体育科教育別冊, 58 (3)